## 1　ゼロからの出発

### いまも“先導役”を担う大阪の実践園

昭和57年5月1日の時点で、日本にある幼稚園の数は公立、私立を合わせ15,152園。園児数227,550人（文部省調べ）。

220 万人余の園児のうち、いったい何人ぐらいが、石井方式による漢字学習を行なっているのか、正確な数はわかっていません。前にも書きましたように、実践園の数を400程度とすれば、やはり、数万人と表現するのが妥当なところでしょう。220 万人の中の数万人――この数字を少ないと見るか、そうでもないと見るか――評価の分かれるところかも知れませんが、およそ 15 年前には、文字通り“ゼロ”だったことを考えれば、やはり“長足の進歩”というべきでしょう。何よりも、今後、ますます問題となるであろう様々な動き――たとえば最近の子どもたちの国語力の低下と、それがもたらす漢字教育の転換の兆しなどに考えをめぐらせば、現状のままに推移する可能性は低いと思われますから、これからの石井方式の普及、発展の余地は大きいものがあるといえるでしょう。

さて、石井方式が“ゼロからの出発”をするさい、小路幼稚園をはじめ、大阪の幼稚園が、積極的な役割りを果たしたことはすでに述べました。

なぜ、大阪が中心となったのか。そしてなぜ、いまでもこの傾向は変わっていないのか。はっきりと石井方式を導入しているのが明らかな実践園は、大阪市内だけで20園近くあり、大阪府下としてみても40園にも及ぼうとしています。全国的にみても、東京や沖縄の実践園の数を上回り、ナンバーワンといわれています。ある東京都内の実践園の園長が、「大阪は、というより大阪人は、建前にとらわれない発想の柔軟さがあるし、“実利”を重んずるためか、子どもや父兄にとってプラスとなれば、果敢に行動に移す決断も速いからでは？」と語っていましたが、このあたりにその理由があるのかも知れません。

ところで、“老舗”の小路幼稚園ですが、大阪市生野区の、住宅と工場の入り混った、いわば下町に当たる場所にあります。昭和43年4月に石井方式を導入して以来、常に今日まで各地の実践園をリードして来ましたが、いまもその姿勢に変わりはありません。井上文克先生が石井先生の著書『私の漢字教室』（本巻第1巻所収）と『一年生でも新聞が読める』（同第 2 巻所収）を読んで、「これだ！」と確信し、すぐさま石井先生のもとへ飛んで行き、石井方式の採用を決定したいきさつは、本巻第 3 巻の冒頭に詳しいのですが、この井上先生の行動力、実行力は、幼児教育全般に著しい成果をあげています。全国350 余の幼稚園を会員とする知能教育幼稚園の会と、同じく 90 数園がメンバーである新幼児教育研究会の会長を務め、55 年秋には、長年にわたる幼児の漢字教育に寄与した功績を認められ、叙勲を受けたほどです。

昭和 54 年には、それまで石井先生の主宰する石井教育研究所と栃木県那須郡のすぎのこ幼稚園で、ごく例外的に行なわれていたといわれますが、一般の園児全員を対象として、全国で初めて漢文を本格的に読ませる試みに着手しました。論語から始め、現在では、唐詩も取り入れています。幼稚園の教室に入ると、壁一面に貼られている太い毛筆で書かれた漢詩、漢文がいやでも目につきます。下町のどこにでもいるような子どもたちが、目を輝かせて、大きな声で朗読する光景はまさに壮観。全く、子どもたちの能力はどこまで底深いものかと驚嘆させられます。反復する度に子どもたちは喜びの表情をみせ、記憶もまた一段と深くなります。問われれば説明しますが、漢文

の意味にはこだわらず、まずは、リズミカルに楽しく「子曰く……」と子どもたちは元気よく朗読を続けます。

「大人が考えて、子どもには無理なものと決めつけるのは良くありません。子どもの能力は大人の想像する以上のものがあります。レベルを落とさず、大人と同じものを与えてもちゃんと受けとめてくれるのですから」

これは井上先生の言葉ですが、子どもたちの持つ測り知れない能力を信じて、実践し続けて来た人だけが自信を持っていい得るものでしょう。

石井方式の導入当時、父兄、園内外の先生方から受けたいわれのない非難の数々は“沈静化”しつつあるとはいうものの、いまでも全くなくなったわけではありません。しかし、今後も「子どもに良いと思われるものはどんどん取り入れていきます」と、井上先生の信念はいささかも変わりはないのです。

大阪には、小路幼稚園とほぼ同時期に石井方式を採用した幼稚園が数園あります。たとえば、旭学園もその一つ。大阪市旭区の第一と寝屋川市の第二を合わせて、園児数 1,400 人以上というマンモス幼稚園ですが、当時、井上文克先生の呼びかけに応えて、石井方式の導入に踏み切ったといいます。以来 15 年、一貫して漢字学習を実践して来ました。漢字カード、漢字絵本、そして、希望者には俳句、百人一首を使ったりと、教材も様々です。近隣の幼稚園には、なかなか普及がむずかしいようですが、3 年ほど前に、そういう園の先生方が見学に訪れたそうで、今後の動きが楽しみというところです。

マンモスといえば、昭和 39 年開園の天宗学園瓜破園（大阪市平野区瓜破西）もそうで、44 年に同第二瓜旋園（平野区瓜破東）、48 年同長吉園（平野区長吉長原）、50 年同東住吉園（東住吉区）と開園が続き、今では、総園児数 950 入、先生も 60 名という大きな規模になっています。

ここでは、昭和 50 年に 4 園が同時に、石井方式を採用しました。まず手始めに石井先生に直接来園してもらい、園児の父兄を集めて公開授業と講演を行なったそうですが、幸い、とくに強い反対意見は出なかったとのことです。

年中・年長組は漢字絵本を中心に、年少では、毎朝の集まりの時に、漢字カードを示していますが、子どもたちは興味深くそれに見入り、読み上げているそうです。やはり石井方式の採用前とくらべ、子どもたちが一様に読書好きになったといい、卒園して小学校に上がると、クラスのリーダー格になる子どもが目につくそうです。

天宗学園と同様、昭和50年に採用したのが、大阪市東淀川区の瑞光幼稚園。こちらも第一と第二があって、園児数は合計約 200 名。この東淀川区内の幼稚園では、漢字学習に熱心な園が多く、区内に所在する十数園のうち、約半数が何らかの形でそれを取り入れているといわれます。

同じく大阪市内の城東区にある諏訪保育園の方針は、いわば“自然体”で、というもの。園児数 200 余名、9 クラスのこの保育園で、石井方式を導入したのは昭和 56 年度からとかなり新しいのですが、園長の喜連川慈雨子先生によれば、キッカケは、石井先生のお話を聞き、その実験を見たため、といいます。初め、園の先生方には、実施はむずかしいという感想が多かったそうですが、「遊びのなかに漢字を取り入れる」という方針に則して、続けられています。喜連川先生は「いまの大人、とくに大学生を見ていますと、漢字を知らなさすぎるので、子どもたちの将来を考え、漢字アレルギーというのか、漢字はむずかしいものだという気持をなくしてあげたいと思ってやっていますが、無

理強いは絶対にしない方針です。もちろん興味のある子はどんどん吸収してきますから、そういう子にはチャンスを与えてやりたいと考えています」と、肩ひじ張らないやり方を強調しています。

近年、都市化が急激に進んでいる東大阪市には、いくつかの実践園がありますが、最も早い時期から漢字学習に取り組んだのがフタバ学園（保育園）です。早期といっても、まだ 3 年前からなのですが、東大阪市内に 30 数園ある私立保育園の先陣を切ったわけで、近隣保育園へも少しずつその影響が広がりつつあるようです。同市内のさわらび保育園が、1 年ほど遅れて石井方式を採用したのを始め、導入を検討しているところがいくつかあるといいます。

昭和 57 年に、例年 2、3 回ほど開かれる主任保母研修会という先生方の会合が、フタバ学園で開催され、集まった先生方に、漢字の公開授業を見学してもらったところ、先生方は一様に子どもたちのすぐれた能力に驚き、「ぜひ自分の園でもやってみたい」と語っていたそうですから、今後、石井方式を実践するところが増える可能性は十分あると思われます。

園長の小山高照先生は、漢字学習を始めてからの、子どもたちや父兄の様子について、こう語っています。

「子どもたちはごく自然に漢字を受け入れ、楽しそうに親しんでいます。父兄の皆さんからは、反対も少しはありましたが、実際に子どもたちが喜んで本を読んだりする姿をみて、それまで多少見受けられた抵抗感はほぼなくなって来ていると思います」

## 障害児教育に積極的な貝塚市の木島幼稚園

大阪府下の貝塚市には、漢字教育を昭和 47 年から採用し、一貫してユニークな幼児教育に取り組んでいる木島幼稚園があります。ここの園長である南宗久先生の持論は、子どもは「天才的に伸びる才能の芽を一人ひとりがみな持っている」というもの。そして、「小学生の“落ちこぼれ”が問題にされています。その原因はいろいろ討議されていますが、やはり幼児教育の不徹底、あるいは軽視に尽きるのではないでしょうか。改めてゼロ歳から三歳まで、また就学前幼児の教育のあり方について深く追求してみる必要があります」と強く主張しています。

南宗久先生は、木島幼児教育研究所を主宰し、同時に帝国女子大学の助教授でもあるのですが、とくに力を注いでいるのが、自閉症児など心身に障害のある子どもたちへの教育です。大阪府下の私立幼稚園で、こういう子どもたちを受け入れているのはわずか 5 園、そのうち文字教育などによる障害児対策に取り組んでいるのは木島幼稚園だけであるといいます。たとえば、その成果などを、昭和 58 年 6 月 12 日付の「読売新聞」泉州版に載った記事で見ますと――。

「独自の指導　心開く障害児　『お母さん』と言えた――貝塚の木島幼稚園　全国から見学相次ぐ」という見出しとともに、精神障害や自閉症を中心にした 3 歳から 5 歳の園児 14 人が通園していること、卒園と同時に小学校の普通学級への全員入学を目標にしており、58 年 3 月卒園した 4 人が、そろって入学を果たした実績のあること、口を閉ざしたままでいた園児が初めて「お母さん」と呼んだケース――などを紹介しています。

こうした子どもたちを受け入れ、幼児教育を実施していることについて、南先生は、木島幼児教育研究所が毎月発行している「育児資料」の第 7 号（昭和 57 年 2 月）に、次のように書いています。

「自閉症の子供でも一年しないうちに一時間坐って勉強出来るようになっていますし、現在、普通学級でりっぱに勉強している子供（IQ

125）もいます。脳障害の子供でも、“頭”の部分の漢字の読みを覚えて（二～三か月後）、はっきりと言うようになりました。普通学級へ行けるかどうかのボーダーラインにいる子供などは、少しの努力、知的刺激をして知能を向上させれば、楽々と普通学級へ行けるのに、就学前の知育はダメだという意見で、延び延びにさせているうち、養護学級へ行かなければならない年齢になり、その時では頭がかたくなって、大事な幼児教育の機会をのがしてしまうことになります」

「このようなことは、障害児だけの問題ではなく……優秀に生まれた子供でも、育て方、教育の方法が適切でないと、優秀に育つとは限りません。反対に、障害を持って生まれても、普通に、又それ以上に優秀に能力を伸ばすこともあります」

こうした、いわゆる障害児をも含め、約 170 名の園児が、木島幼稚園に通園しています。漢字絵本、俳句カルタ、諺遊びなどを中心に、漢字学習が実施されていますが、みなそろって本好きになり、小学校へ上がっても、まず“落ちこぼれ”になる子どもは絶対にいないといいます。幼稚園ではそれほど学習の面では日立たなかったが、「小学校では勉強がラク」という子も多く、なかに「子どもができすぎてやりにくい」という小学校の先生の声すらあるほどだといいます。

「幼稚園では、遊ばせて、体を動かしていればいいというのは、まさに、“動物教育”ではないか」と強い口調で疑問を投じる南先生の方針は、今後もゆるぎなく実践されていくことでしょう。

## 活発な動きを見せる神戸市の実践園

大阪から兵庫県へ目を転じますと、何といっても、やはり神戸市が最もさかんに石井方式が実践されています。たとえば、灘区のあさひ幼稚園など、十数年の歴史を持っています。ここの幼稚園でユニークな点は、“躾”に重点を置く教育方針をとっていること。漢字も躾の話に関係した、姿勢、笑顔、挨拶などのカードを独自につくり、子どもたちに示しているそうです。また、子どもたちのなかには“漢字博士”とニックネームのつく子もいて、その習得率はすばらしいものがあるようです。あるいは、卒園生の通っている小学校の先生から「漢字力のある子どもは、すべての学科の成績が良いですね」と評価を受けたといいます。園長の高沢三子先生によると、近郊の幼稚園への普及活動もいろいろと試みてみましたが、まだ反対の声があって、なかなか石井方式の採用に踏み切れずにいるところが多く、「当園だけでもしばらくは努力し続けていきたい」ということです。

このほか、神戸市内では、ホザナ幼稚園、高羽幼稚園、平田幼稚園などが、石井方式の実践園として知られています。

洲本市では、サカエ保育幼児園が昭和 53 年ごろから漢字学習の実践を続けています。58 年度現在で、6 クラス、147 名と平均的なスケールの幼稚園です。石井方式の採用当時、園児の父兄はびっくりし、教師の間にもためらいがあったようですが、いまは、みな落ち着いて取り組んでいるそうです。漢字学習を行なう機会のなかった園児の兄や姉よりも、園児はやはり国語力では一歩リードしているそうで、なかには親でも読めない漢字をスラスラと読んでしまう子どももあって、こうしたエピソードにはこと欠かない様子です。